

「多様な国の子どもと一緒に学ぶということ」 普遍の緊張関係 偏見と差別

東京学芸大学非常勤講師 善元 幸夫

グローバル化社会の子どもたちの教育はどうあるべきか。二つの視点で考えた。それは自国文化中心主義から脱却すること、子どもたちの固有な文化、価値観の形成である。かつて私は小学校で、中国の引き揚げの子どもたち、外国から来た*ニューカマーの子どもに日本語を教えていた。そこで気づいたことは、子どもたちに自らよって立つ民族性や文化と決別することではない、同化社会日本で、多民族文化国日本を形成すること、つまり子どもたち自身が、自国の文化と再び出会うことである。

また今、私は年一度沖縄の宮古島で小中学校の子どもたちに授業をして8年、韓国の教員とは実践の授業交流をして今年で23年目でもある。今年5月には韓国の小学校6年生と授業をしてきた。そこで得た体験の中でシンプルなことに気付いた。それは「多様な子ども」の存在で、そこでの「価値観、学力観を決して国やマジョリティの側が押し付けないこと」で「私たちはともに学ぶ」という事である。そのことを記憶にとどめて覚書として記してみたい。

その1 残留孤児の子ども・同化を強いる日本社会

私は1973年大学を卒業以来、中国や韓国からの残留孤児たちの日本語教育に携わってきた。当時の日本語教育は、子どもたちの母語を遮断することであった。

「日本に来たのだから中国語を使っ

ダメ！」

「中国人同士であつまってはダメ！日本語が覚えられない！」

教師は善意で子どもたちに母語の使用を禁じていた。その結果、子どもが習得する日本語も歪んでいく。子どもたちは元気が出ない。時には荒々しい子どもの関係になった。「多様な国の子どもと一緒に学ぶこと」という視点で今までの仕事を通して振り返ってみたい。

中国から日本に引き揚げてきた子どもSはこう書いた。

「なんでぼくをいじめるのですか
それは中国と日本せんそうしました
日本まけた、中国かった
だからおまえのせいだといいました
ぼくはこたえました、なんでぼくの
せいですか
ぼくはせんそうをしりません、ぼくの
せいじゃない
ぼくはせんそうがはじまりのとき、
ぼくはうまれていませんでした」

敗戦を中国、朝鮮で迎えた引揚げの子どもたちが、敗戦後日本で生まれた日本の子どもにいじめを受けたのである。そのSはいじめを憎しみとして返すのではなく希望を語る。卒業を控えた6年生の時、彼はこう書いた。

「ぼくは口ではともだちなんていないというけど
こころで言えばみんな僕のともだちです
こころとこころがつうじればかならずともだちができます」

ぼくはたとえつらいことがあっても
まけないでがんばればきっとあらわれ
れます

ぼくはともだちになれるまでまっ
ています」

「ぼくはひとの心がしりません

ぼくはこうおもいました

ひとの心をひらくのはむずかしいと
おもいました

でもぼくはこうおもいました

ひとの心をひらくのはまずじぶんの
きもちと心をあいてにつうじるど
りよくをすることだとおもいました

ひとの心がひらけると心がつうじ
るとおもいました」

その2 ニューカマーの子ども 国境を越える子どもたち

・1980年代後半、ニューカマーの子
どもたちは激増する。

来日後の不安な状況で、子どもた
ちは日本のいじめにあい、その苦悩を自
分の心の中にしまい込んでしまう。多
くの子どもはそのような出来事を親に
は話さない。子どもは苦労しながら働
く親を前にして、とても自分の悩みは
言えないのだろう。ある子どもはこ
う書いた。

「いじめられたことはぼくもあり
ます。

ぼくはこう思いました。

言っている人のことを気にしないほ
うがいいとおもいます。

バカとか言われてもおこらない方が
いいです。

なぜかというケンカになるからで
す。

ずっといわれたままだったらおこ
ります。

あんまり言ってなかったらがまんし
ます。」

子どもたちは現実にはさまざまな理
由により、日本の社会で追い込まれて
いる。

その一つに家族の問題がある。来日
後、親と子に軋轢が生じる。「日本語し
か話せなくなった子ども」と「日本語
がうまく話せない親」でコミュニケー
ションが取れない。同じ家に住みなが
ら、日本で生まれ育ったためほとんど
「母国語が話せない子ども」が、「日本
語がうまく話せない親」をバカにした
り、あるいはそれを恥ずかしく思い、
日本の子どもの前で親を隠したりする
のだ。親と子どもの間には微妙なゆら
ぎがある。国際結婚で日本に住むある
子どもはこういった。

「お母さん、あっちに行って！お母
さんいると話し下手だから私が韓国
人ということがわかってしまうから。」

またある子どもは学校のことを話さ
なくなったと心配し親はこういった。

「先生、すみません。私、日本語が
できない。子どもが学校のこと話さ
ない。」

ここには家族の絆が途切れるほどの
現実生活のきびしさもある。親は子ど
ものために昼も夜も働く。残された子
どもは浮遊感覚で夜出歩き、寂しい思
いをする。子どもは放置されてしま
うのだ。

・自尊感情

韓国から来た子どもがこう書いた。

「日本にきたとき、ともたちにい
じめられた。『かんこくじんばかや
ろ。』ぼくはとつてもやたった。な
んでそんなことをゆうのか？わか
りません。韓国じんきらいなの
かな？ぼくはかんこくが大すきです。

…日本語タイムのときお母さんがかんこくのたいこをたたきました。ぼくは韓国が大すきたからうれしかった。」(R 9才)



この子のためにキムチの授業をした。その最後にキムチを作り、キムチがクラスの子どもたちと新たな出会うきっかけになればいいと考えたからである。日本人も大好きなキムチ、しかし問題もある。「韓国人、キムチくさい！」

それぞれの固有な文化を多様性と考えるとき、その多様性を受け入れる感性である。それを考えて公開授業で生き味の授業をした。味覚の教育である。キムチ臭いということをも R がどう受け止めていけばいいのか。

授業公開日に私はあらかじめ用意した「キムチ・ブルーチーズ・納豆」の匂いを嗅ぐという授業である。R はキムチの時はニコニコして、納豆の時には少し違和感を感じたようであったが、その次にブルーチーズの時であった。R はとびっきり臭いという動作と顔をしかめた。正直な反応である。同じものを参観していた学生にも試した。するとなんと R が強く反応したチ

ーズを「いい匂い！」といったのである。R は驚いた。しかしここで R は深く悟った。自分が嫌いな匂いを日本人は「いい匂いだ！」と言う。匂いは相対的、文化の違いだということに気がついた。キムチも同じなのである。R から偏見や差別が何に由来するかおぼろげに見えてきたのだろう。

その3 沖縄の子ども 自尊心(逆さ地球から見たもの)

・国際的「視野」をひっくり返す
「逆さ地図」は沖縄の宮古が地図の上になる。これがいい、弧を描くようなアジア大陸。グーグルの世界地図には海の部分がとてもいい。これを見れば大陸の沿海が内海に見える。そしてその上に沖縄、宮古がある。この地図を見れば昔の人がここを起点として「海人」になったのも理解できる。グーグルに感謝である。くどいが日本人が使用する既存のアジア地図では沖縄の子どもにとっては単なる周辺としか見えなかったのだ。中3のある子はこう述べている。

「私は宮古だなんて田舎で、何もなくてつまらない所だと思っていましたが、何もない所に多くが詰まっていることを、授業を通して知り遺跡を巡ったりしました。何もない宮古島でなく『魅力が隠されている宮古島』と思えるようになりました。これから過疎化が進み3万人台になるらしいのですが、私が大人になったら、またこの島に戻ってきて、この隠された魅力を多くの人に伝える仕事をしたいです」

まさに自尊心をもって「地域観の形成」である。今年は7月に久松小学校6年生と行う授業「地下ダムと島唄」を総合学習でやってみたい。これはダ

ム資料館で子どものリアルな体験、そして宮古の島唄のライブである。

その4 韓国の子ども マングローブと平均寿命

韓国と教育実践交流をして23年、5月韓国の革心学校で6年生の漢字の授業(2時間)をしてきた。通訳なしの2時間は緊張したがとてもおもしろかった。ここでは冒頭の15分間の導入部分を紹介したい。

展開

・今日は皆さんと漢字の学習をします。
ところで、皆さん平均寿命ってなんだか、わかりますか？

(みんなで考えてみる)

①2015年、平均寿命はどのくらい？

(問いの意図は医療が進む日本、遅れている韓国のステレオタイプの概念を壊すこと)

答は「日本83.7歳、韓国82.3歳」です。
(みな、驚く！)

②さあ、ここからが問題です。

・皆さんはすでに授業で日本の植民地時代の学習と聞いていますが、では植民地時代に韓国に住んでいた日本人の平均寿命はどのくらい？

植民地時代の韓国に住んでいた韓国人の平均寿命は？

(同じ地域に住んでいた人の平均寿命をみんなで考えてみる)

答は「1926年の韓国人は34歳、1935年の日本人は42歳」みんなどう？

③そう8歳も違う、なぜ？(理由をホワイトボードに自由に書く)

*理由は、栄養状態が悪く、伝染病が蔓延、幼児の死亡率が非常に高かったなど。

平均寿命から日本の統治時代が見えてくる。このように授業は多様性をおびているのである。

まとめ 生物の究極の多様性 私たちはどこに行くのか

・グローバル化の中で多様性が求められている現在、その方向性を考えてみたい。私たちが言う多様性とは、とりあえず国や民族を超えた普遍的な価値観を求めているように見える。しかしそのことを生物学のレベルまで広げたらどうか。こんなニュースがある。

*「地球上の生物の多様性」【2011・8・24
発信地：ワシントンD.C./米国AFP】

地球上に870万種以上の生物が存在する論文。現行は1700年代半ば約125万種が発見。今回、870万種と予測が「これまでで最も正確な予測」と評価。陸の生物の約86%、海の生物の約91%が未発見。5万9508種を監視、1万9625種絶滅危機

多様性を考える時、人類史を生物の歴史で見たらどうか、生命36億年の歴史でヒトはつい最近誕生したのだ。人の歴史では現在せいぜい700万年前、とりわけホモサピエンスはわずか20万年をたどれるであろうか。

私のクジラの授業実践がある。クジラの進化に着目してみた。かつてクジラは海から陸に這い上がり、陸上に住んでいた。5300万年前の出来事である。陸上時代のクジラはまるで恐竜か牛の如く地上に這いずり回った。そのクジラはやがて海に戻った。この授業の目的は単なる壮大な進化の物語を知るだけではない。ではなぜクジラは海に戻ったのだろうか。このことを明らかにして、これから子どもたちが目の前に出会う様々な多様性や、困難な課題から未来を志向できると思う。紙面の関係上、割愛するが私の結論は人間が生き抜くためには「人間中心主義」をやめないとその存続が危ういということである。

最近、私は冒頭に述べた「価値観、学力観を決して国やマジョリティの側が押し付けないこと」をもう少し深めて考えている。それはこの地球は、宇宙はどのような原理と方向性を持つのか、果たしてその結論とヒトの進化は関連があるのかないのかである。

・ドラマと科学の対話

2012年、宇宙や生命や世界の諸問題の解決のため、ノーベル平和賞のグライ・ラマ法王14世と、日本の科学者との対話があった。「科学との対話」のセッションでは不規則系物理の研究者である元日本物理学会会長・米沢富美子が「あいまいさの科学」のテーマで「科学が進んでもわからないことが分かる」としていくつかを指摘し、実に強烈な印象が残った。米沢の論点のキーワードを挙げると次のようだ。

現代科学とは

- 1 両義性 (ambivalency)
- 2 多値性 (multi-value)
- 3 漠然性 (vagueness)
- 4 蓋然性 (probability)
- 5 予測不能性 (unpredictability)
- 6 不確定性 (uncertainty)
- 7 多様性 (diversity)
- 8 不可知性 (impossibility of knowing)

としている。米沢は会長に就任当時(1996年)、「物理学あるいは科学そのものの変遷」について「学問の対象や研究方法は当然ながら時間とともに変遷していく。物理学において興味あるテーマは、物理学以外の学問との学際的な取り組みでより実りある成果を望めるものが多い。現在はそれが非常に顕著な形で現れている時期である。」とした。

「あいまいさの科学」が教育に深い示唆を与えてくれる。グローバル化の現代、世界の出来事、関係性の視座の転

換がはかられている。現代社会は私たちの生活から「時間と空間の観念」を変えてしまった。特に「多文化共生につながる教育の可能性」を考えると規制の枠組みを解体しパラダイムの転換がはかられている。まさに枠組みを取払い、多様な視点で考える。まだまだ現在の教育の混沌に考えを深めていきたい。

※ニューカマー 1980年代後半に日本へ渡り、定住した外国人

プロフィール

善元 幸夫 (よしもと ゆきお)



1973年東京学芸大学教育学部を卒業し江戸川区立葛西小学校(日本語学級)で中国・韓国からの残留孤児2世に日本語教育を行い、日本語学級研究会を組織し、子どもたちの進路保障に力を注ぎ高校入試の改善をおこなった。「地域化をめざすアジアの国際理解教育」の必要性を感じ、1995年「日韓合同授業研究会」を作り、日本・韓国・中国の国際交流研究会を開催し、ベトナムの多言語教育にも関わり現在にいたる。

現在、新宿の韓国にルーツの子どもの学習支援「チャプチョ(雑草)の会」5年目組織

2003年新宿区立大久保小学校日本語国際学級に赴任し、ニューカマーの子どもたちの教育を担当する。民族のアイデンティティの保全を大切にしたい日本語の教材開発に専念し、都の日本語教育のテキスト2巻を作成した。特に漢字教育には力を注ぎNHKテレビやラジオ、雑誌などで学習メソッドを提案し、地方での講演にも力を入れている。

「漢字のおもしろさを知らないで死んでしまったら人生もったいない」が信条である。

現在、目白大学、東京学芸大学の兼任講師、南米教師のための日本語教師(JICA横浜)などなども担当している。

著書に「地域と結ぶ国際理解(編著)」「アドバンテージサーバー」、「国境を越える子どもたち」(社会評論社)、「今、教師は何をすべきか」(小学館)、「生命の出会い」(筑摩書房)、「おもしろくなければ学校じゃない」(アドバンテージサーバー)、「ほんとはネ、いじめっこじゃないよ」(ポプラ社)／韓国翻訳(ポリ出版)、教科書出筆(中学校版・国語)などがある。

趣味は露天風呂めぐり。